

---

# 東方戦隊録

氷牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方戦隊録

### 【Nコード】

N0428Y

### 【作者名】

氷牙

### 【あらすじ】

派手に始まるゴーカイバトル！

## 第0話「プロローグ」(前書き)

これはスーパー戦隊と東方projectの二次創作です

## 第0話「プロローグ」

暑さが少し残る九月上旬、日本のある丘の上で少年が一人空を眺めていた。

「・・・・・・・・」

彼は天野郁人、少し細い眼が特徴的で物静かなオーラを纏い、白いシャツにジーパンとラフな格好で丘の柵に乗りかかり空を見上げている。

風が郁人の頬をなでると同時に少しだけ長めの髪が揺れる。

郁人はその風を胸一杯に吸い込んだ、冷たくてほんのり暖かい風が体中をめぐる、そしてゆっくりと吐き出す。

「さてと」

戻るか、と思い後ろを振り向いた瞬間落ちた。

「！」

いや正確に言えば突然足場がなくなったのだ。

驚いて下を向くとなんと郁人のいる場所とその周りだけ切り抜かれたようにぽっかりと穴が開いていた。

そしてその穴の中はまさに闇と呼ぶにふさわしいくらい真っ黒だった、そしてその闇の中に無数の目が存在していた。

そして郁人の体は重力に従い無数の目がある闇に落ちていく、郁人はあまりにも突然すぎて体が反応せずそのまま吸い込まれるように落ちて行った。

「うわあああああああああああ!!!」

「.....うっ」

気が付き少し痛む体を少し起こし周りを見渡すと、そこは目を見張る光景があった、なんとそこは和室だったのだ。

何の変哲もない普通の和室。

郁人はまだ少しブーツとしている頭を振り意識を覚醒させる。

「ここは、どこだ・・・」

改めて周りを見渡す、すると突然ふすまが開き奥から女性が二人出てきた。

一人の女性は金色の長い髪で白をベースにところどころ紫色のラインが入ったドレスを着ており赤いリボンが付いた白い帽子をかぶっている何所か不思議なフィンキを醸し出している。

そしてもう一人も金髪で白を基本に青いラインが入っている服で二本の突起が出た帽子をかぶっている、そしてその女性だけなぜか尾が生えていた、しかも九本。

「どちらさまですか？」

「自己紹介がまだだったわね、私は八雲 紫」

紫と名乗った女性がもう一人の女性を手で招き

「こっちが八雲 藍 私の式よ」

藍と紹介された女性がぺこりと頭を下げる。

「式、式神のことか？」

「そうよ」

「あなた達は一体・・・」

「まあ簡単に説明するとね、ここは異世界なの」

「異世界？」

「そうだからね・・・」

少女説明中

「どう、わかった？」

「まあ、大体は」

いまだに信じられないといった表情で郁人はうなずいた。

「それで私はあなたに謝らなきゃいけないことがあるの」

「？」

「さっき話したとおり私たちには能力があることはわかってくれたわね？」

郁人は静かにうなずいた。

「実は原因はわからないのだけどここ最近うまく力が出せないの」

「えっ？」

「そのせいで私が移動しようとするスキマを出したらうまくコントロールできなくてあなたを巻き込んでしまったわけ、そうこれはまさにこの世界に起きた異変なのよ」

「へ」

「そこで」

と指先を郁人の鼻の前に突きつけてきた。

「今回の異変解決にはあなたも協力してもらおうわ」

「は？」

一瞬ポカーンとした顔になる郁人。

「ちょっと待てよ」

「そういえばあなたの名前まだ聞いてないわよね？」

「天野郁人だけど・・・」

「じゃ郁人頼んだわよ」

「だからちょっと待てよ」

無理やり話を持っていきこうとする紫をどうにか止めて話し始める。



「ちょっと待てなんで俺がこの世界の異変解決なんか手伝わなきゃならないんだよ」

「さっきも言ったでしょこの異変が起きてる限りもともこの世界にいた住人達は半分も本来の力を出せないじょうたいなのよ、だからこの異変の影響を受けないあなたが一番適任なわけ、おわかり？」

「いや、そうかもしれないけれど」

「それに私の力や幻想郷の住民の力がなかったらあなたは元の世界に帰ることすらできないのよ」

郁人はしばらく考えると。

「わかったよ、やってやるよ」

諦めたように溜息をつきながら首を振る。

「決まりね」

「で、俺は具体的に何をすればいいんだ？」

「そうね、まずはその説明ね、藍あれを」

「はい」

すると藍は小さな手のひらサイズの人形を取り出した。

「なにこれ」

「レンジャーキーと呼ばれるものだ、これにはとてつもない力が含まれている」

藍はそれをほね、と郁人に手渡す。

郁人はそれを受け取り眺める。

「そしてこれが幻想郷中に散らばっているからこれを集めてほしいの」

「これが今回の異変とやらの原因？」

「そうよ」

「とてもそうには見えないが」

手元のレンジャーキーを弄びながらつぶやく。

「確かにそれ一つではね、でもそれは数が増えることに力が増していくの、そのせいで幻想郷事態に影響が出ているの」

「ふうん、あでもここには妖怪がいるんだろ？襲われたらどうすんだ？」

「あなたが自分で追い払うのよ」

さも当然のごとく返す紫。

「いや、俺ただの人間なんですが・・・」

「あ、安心してあなたにはこれを使ってもらおう」

紫はどこからか分厚い携帯を取り出し郁人に渡す。

「これは？」

「それはモバイレーツ、レンジャーキーを使いこなすのに必要な道具よ、使い方は後で藍に聞くといいわ」

一通り話が終わると紫は立ち上がった。

「じゃ、行くわよ」

「え、どこに？」

「さっき話した通りそのキーは一つだけだとそこまで強くない、つまり本来の力が出せないの、だからあなたのほかにも異変を解決してもらおう人のところに行くわよ」

紫はそういうと先に外へ出てしまった。

隣を見るとさっきまでいた藍までいなくなっていた。

「はあ・・・」

これからどうなるんだろうという不安と異世界に来たという少しの好奇心を胸に紫の待つ外へと飛び出していった

U  
U  
<U  
U

## 第0話「プロローグ」（後書き）

初めての投稿でしたがどうでしたか？

感想や指摘をもらえるとうれしいです

次回第1話

平和になら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0428y/>

---

東方戦隊録

2011年10月30日04時33分発行